

氏名	新川 美湖
ヨミガナ	ニイカワ ヨシコ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博美第702号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文） 中学校美術科における「日本絵画」教育の研究 （作品） 武蔵野四季図屏風

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津 文哉
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	青柳 路子
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤 典彦
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	渡邊 五大

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、中学校美術科における「日本絵画」に関わる教育の変遷と現状を明らかにし、同科におけるこれからの日本絵画学習の望ましい在り方を探究することにある。

なお本論文では、墨や和紙、岩絵の具といった伝統的な画材を中心として描かれた作品全体を指す時には「日本絵画」とし、明治時代中期以降に描かれ、岩絵の具等を多用した近代日本絵画のみを指すときには「日本画」として論を進めていく。

これまで筆者は、日本画制作の実技研究と美術教育の理論研究、および教育実践に携わってきた。その中で日本画を水墨画や浮世絵と混同して理解される例が極めて多く、西洋絵画と比較したときに、日本絵画に対する理解が十分に得られていないと強く感じてきた。一方、学校教育における美術教育では、2008年度の学習指導要領の改訂以降、「美術文化の継承と創造への関心を高める」という姿勢が重視されてきた。そして図画工作科・美術科の教科書では、日本絵画の「鑑賞」に関わる図版が多く掲載されるようになり、さらに水墨画をはじめとする「表現」教育の題材も必ず取り上げられるようになった。とくに「表現」教育においては、2018年に筆者が行った学習履歴アンケート調査で、東京近郊の小学生の6~7割が墨を使用した「表現」教育を受けていることが明らかとなった。これは10年前の小学生に相当する、同年の大学生を対象としたアンケート調査と比較しても急増しており、この10年間で日本絵画に関わる教育が、図画工作科・美術科において急速に浸透しつつあることが確認できた。

しかしこれまでの先行研究では、日本絵画に関わる教育の実態を、包括的に捉えようとする調査研究は管見の限り見られない。また美術科教育の歴史についての研究は充実しているものの、近年の日本絵画教育の動向を捉えることができるような、日本絵画に焦点化した歴史研究が十分に行われているとは言い難い。さらに「表現」教育の指導法については、日本画の実技研究を行ってきた筆者にとっても、有効な指導方法や使用画材において不透明な部分が多く、教育現場の実態を明らかにしながら、筆者自身の制作研究も加えて探究していく必要があると感じられた。

そこで本論文では、中学美術科を中心とする日本絵画教育の変遷を追いながら、現職教員を対象としたアンケート調査により、日本絵画教育の現状と課題を明らかにする。さらに筆者自身による、中学校美術科における日本絵画を題材とした教育実践と詳察を踏まえ、今後の教育の充実のために、望ましい学習の在り方や支援の在り方について考察する。

これからの時代を生きる子供達にとって、日本絵画に関わる学習の内容が、単に自国文化を称賛するだけのものではない。グローバル社会を生きる世代にとって必要とされるのは、自国の文化を理解し、自信をもって発信しながら、同時に異文化を理解し対話していくことができる力である。本研究は、

そうした子供達の育成の一助となることを目指していく。

本論文は次のように構成する。

第1章では、とくに2008年以降の学習指導要領に見られる変化に着目しながら、学習指導要領と、小学校図画工作科教科書及び中学校美術科教科書の内容をもとに、戦後の日本絵画に関わる教育内容を分析する。とくに年代別掲載量の推移や重視された学習内容の変遷、その背景を調査することで、現在の教育につながる視点を捉えていく。第2章では、近年図画工作科・美術科で取り組まれている水墨を中心とする日本絵画の「表現」教育について検討するために、戦前の学校教育で取り組まれていた「毛筆画」教育に遡り、指導方法で現在と教育的視点が異なることに留意しながら、比較検討していく。とくに当時の教科書と共に教師用指導書を分析することで、墨や筆を用いる表現のための指導法や使用画材について考察していく。

第3章では、中学校美術科の現職教員、および小学校高学年担当の全科教員を対象としたアンケート調査の結果を参照にしながら、図画工作科・美術科における日本絵画教育の現状と課題を明らかにしていく。

第4章では、これまでの調査に基づく、筆者自身による中学校美術科における実践研究を行い、その有効性や今後の発展性について考察する。

終章では第1・2章の歴史的考察と、第3・4章の実態調査・実践研究から得られた考察をまとめ、これからの中学校美術科にもとめられる日本絵画に関わる教育や支援の在り方について、結論を述べる。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、近年、中学校美術科の教科書に「表現」の題材として水墨表現が掲載されるようになったことに着目し、中学校美術科における「日本絵画」教育の変遷をとらえながら、同教育のこれからの在り方について考察したものである。論述の中心は中学校美術科であるが、連続している小学校の図画工作科についても論及されており、また申請者自身による日本画の制作研究と、中学校美術科における教育実践の経験が生かされているのが特徴である。

本論文は、主に次の3点から高く評価される。

第1に、中学校美術科の教科書を主な資料として、近年の美術科教科書で水墨表現が取り上げられるようになった経緯を詳細にとらえたことである。これは戦後の「日本絵画」教育を理解するにあたっての貴重な研究成果である。

第2に、美術科教員に対するアンケート調査により、中学校美術科における水墨表現教育の現状と課題をとらえたことである。東京都中学校美術教育研究会の協力により実施したアンケート調査では、美術科において水墨表現の授業を行っている教員が一定数いるものの、その割合は決して高くはなく、実際に授業で取り上げることに困難を抱えている教員が多いことを明らかにした。

第3に、アンケート調査によって明らかになった課題の解決を図るため、戦前の毛筆画教育の指導書を一つの参照軸として、現代の中学校美術科の水墨表現を充実させる手がかりを得たことである。これをもとに申請者は、中学校美術科における教育実践に取り組み、その有効性を実証的に示した。

戦前に毛筆画教育として行われていた墨と筆を用いた表現は、戦後の学校教育では取り上げられなくなった。しかし近年、水墨の「表現」を学ぶ題材が美術科教科書で掲載されるようになってきている。本論文は、こうした中学校美術科の動向を歴史的な視点からとらえ、さらに美術科において新しく取り組み始めた水墨表現を充実させる手立てを示したことにおいて、美術教育界における研究として有意義なものである。その成果は、主として中学校美術科の「表現」教育に認められるが、本論文では「日本絵画」の「鑑賞」教育についても十分に論じられている。そして「表現」と「鑑賞」を一体化させ、グローバルな視点からこれからの「日本絵画」教育の在り方についての考察したことも本論文の成果として認められる。

審査委員会では、本論文の成果を高く評価しつつ、現在の中学校美術科における水墨表現を充実させるために、戦前、特に明治期の毛筆画の指導書を参照することの課題と限界が指摘された。明治期と現在とは教育目標が異なる上、明治期の理論や概念をそのまま現在の美術教育に応用することには慎重な検

討が必要となるためである。この点については、申請者も十分に自覚し今後の課題としてとらえており、本論文の価値が損なわれるものではないことが確認された。

以上のことから、審査委員会は、本論文が課程博士論文の水準に十分に達しているものと全員一致で判定した。

(作品審査結果の要旨)

申請者は近年、墨による風景表現にこだわり制作を続けている。そこには、墨という伝統的な描画素材に関わることにより、この国の伝統的な表現の深層に迫りたいという申請者の強い思いがある。しかしながら、その試みは、墨や筆で文字を書き、絵を描くことが日常生活の中で普通行われていた地点から、はるか遠くに来てしまっている私たちにとって、現在、この地点からの試みにならざるを得ない。そのようなもどかしさを孕みつつも、この作品は、これまで申請者が取り組んできた墨による作品の集大成ともいえる作品となっている。

作品は、これまでのパネルに描かれたものとは異なり、六曲一双の屏風を支持体としている。これも伝統を多角的な視点から理解したいという申請者の切実な思いからであろう。そのため申請者は屏風製作実習にも参加し、骨の制作から下張りなど屏風の構造を実際に体験することにより、絵画制作からだけではなく屏風表現そのものについても理解を深めようとしている。

画面には武蔵野の風景や花々が、右隻に春夏、左隻に秋冬と季節を追いながら描かれ、最後の一扇には雪を被った富士が描かれる。春の桜や季節折々の花々は、幾重にも丁寧に塗り重ねられたうす墨により、塩粒による白抜き効果とともに繊細に表現されている。これらの繊細な描写の美しさは、これまでの作品でさまざまに試された墨による描写の結実であり、この作品の特筆すべき美点ともなっている。

課題としては、細部の描写が勝ってしまったことにより、奥行きが逆転して見えてしまう箇所が生じていること、そして左右の画面での地平線の高さの違いが全体の空間構成を損なっていることなどがあげられる。また、描き残された部分を、再現的な奥行きとするのか、さらに深い要素も含む余白とするのかなど、申請者の伝統的な墨による絵画表現への理解の深化と、さらなる造形意識の徹底が求められよう。

このように課題は残るが、武蔵野の四季が丹念に描かれたこの作品は、墨の調子の丁寧な積み重ねと端正な描写により、申請者の墨による作品の一つの到達点ともいえるべき充実したものとなっている。

審査会においても、申請者の堅実な描写能力と繊細な表現が高く評価され、審査員全員が博士の学位に相応しい作品であると判定、合格とした。

(総合審査結果の要旨)

審査申請者：新川美湖の論文・作品についての審査について総合評価を記すものである。

申請論文：『中学校美術科における「日本絵画」教育の研究』の内容は、美術科教育の中の「日本絵画」と「日本画」に焦点化し、戦後教育における「鑑賞」と「表現」の美術科学習内容を詳細に調査・分析している。また中学校美術科の教科書における、水墨表現を中心とした日本絵画教育の研究について、使用されてきた・或いは使用されている美術科の教科書を種々実見し、細部にわたって研究・考察することによって申請者の研究の目的を明確に検証していく考察を重ねている。

その検証をより客観的にするために、関東近郊の小学校・中学校も現職美術科教員に対しアンケートを行うことにより、現状の水墨表現教育の現状と課題を明確にすることを試みている。そこで明確になった教育現場での実際的な現状に関し、美術教育における理論研究と日本画の実技研究の経験を生かした教育実践の効果の考察・研究を思考している。申請者の意識としては、グローバル化の進む現代において求められる「日本絵画」に関する教育の在り方に意義を求めている。

申請作品「武蔵野四季図屏風」においては、日本の伝統絵画に見られる現代的な表現について研究し、新

しい表現方法を模索している。日本の季節や時間の流れを、雲や霧などの湿潤な大気の循環を表すため、六曲一双の屏風に墨のみの描画に挑戦している。そうすることで、モチーフに取った武蔵野の春から冬までの季節を画面に盛り込み、描き込むことで身近な自然の情景を柔らかく表現している。岩塩を使用した白抜き効果や、たらし込みなどの日本画独特の伝統的な技法なども用い、柔らかな自然表現を2次元に定着させる試みも行っている。

論文においては、明治期と現代で異なっている教育目標及び教育概念、時代背景がもたらす本論の研究目的への影響等の指摘があったが、本論の価値が損なわれるものではない事。

作品についても、細部への執拗ともいえる描き込みが空間構成に及ぼす影響、それが本作の構図の目的の一つである余白の幽玄、の表現について負の影響を及ぼしかねない事、についての指摘があったが、作品全体の迫力や大勢にはそれほどの影響がない事、などが考慮され、審査員全体で協議した結果、論文・作品共に合格の評価に達する、との審査結果となった。